The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本生まれの「外国人」の子どもの教育とエスニック・アイデンティティ ーベトナムにルーツをもつ第二世代のエスノグラフィーー
Author(s)	薮田, 直子
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76348
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　薮田　直子　）	
論文題名	日本生まれの「外国人」の子どもの教育とエスニック・アイデンティティ ーベトナムにルーツをもつ第二世代のエスノグラフィーー

論文内容の要旨

本論文は、関西圏に位置するP市をフィールドとして、日本に暮らす「外国人」のエスニック・アイデンティティの形成と表出を、学校、民族学級、地域活動の３つの場から考察した質的調査研究である。具体的には公立小学校１校と、地域のNPO法人を調査対象とした。調査対象の選定にあたっては、「オールドカマー」という呼び方で表現されることもある在日コリアンと、ニューカマー（新渡日）外国人の両者が共存する地域を選定し、地域の文脈や教育実践の連続性のもとで日本に暮らす「外国人」の子どもたちの教育を描いた。その際、研究対象となる「外国人」の子どもたちを「日本生まれ」であるという共通項で捉え、抽出することで課題の明確化を図り、教育実践の具体的発展を目指した。

論文の構成は第1部と第2部からなり、第1部では第2章、第3章、第4章において、それぞれ別の機能をもつ3つの場として学校、学校内の民族学級、地域の中の言語教室が紹介される。第2部には、第5章、第6章が含まれており、直接的にアイデンティティを主題とした部分となっている。第1部が「場」であったのに対して、第2部のテーマは「人」である。具体的には、日本生まれのベトナム人青年の当事者の語りに加えて、かれらを取り巻く保護者（母親）、学校教員、地域活動の支援者の3者のおとなが、ベトナム青年のアイデンティティ形成にどのような期待を抱いているのか描いた。これら「3つの場」と「3つの人」つまり環境や他者からの影響を受けたものとして、個人のエスニック・アイデンティティの形成と表出を読み取るという構図である。そしてこれらすべてを貫いているのは、日本生まれの「外国人」の子どもの教育課題とは何か、という問いであり、それに対する応答としては、言語や学力（教育達成）の課題だけではなく、アイデンティティ形成の課題であるということとなる。

本論文の知見は、大きく分けると以下の2点にまとめることができる。第一に、日本におけるニューカマーを対象とした教育研究の分野に対して、ニューカマー児童生徒の適応指導のその後を描いたということである。ニューカマー外国人の受け入れから30年近くが経過しようとしている今、日本生まれの「外国人」の子どもたちは、外からは見えにくいアイデンティティ形成の課題を抱えているのである。第二に、マイノリティのアイデンティティ研究への貢献である。本研究は、Goffman（訳書，2012）の社会的アイデンティティの管理概念を手がかりに、個人がどのようにエスニックな自己を呈示するのかということについて考察した。そこでは、場の機能に着目し、個人のアイデンティティ形成と表出においての、場や他者からの影響力を分析の俎上にのせた。

最後に、本論文が示唆する実践的なインプリケーションも以下にまとめておこう。子どもたちの背景の多様化が進む中で、学校や地域で新しい「在日外国人教育実践」が必要とされている。日本生まれの「外国人」の青年の語りからは、日本名で日本人として生きるか、民族名で外国人として生きるかの二者択一でない自己のあり方が明らかとなっていた。

これらの知見をもとに、日本の旧植民地出身者の歴史、そして多様性を育むためにこれまで創りあげられてきた在日外国人教育実践の成果と知見の蓄積の上に、今後の「日本の」子どもたちのための教育実践、そして研究を積み上げていく重要性をうったえることができる。

＜引用文献＞

Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, New Jersey: Prentice-Hall Inc.,（＝2012，石黒毅訳，『改訂版　スティグマの社会学－烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房）.

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　薮田　直子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	志水　宏吉
	副 査　教授	高田　一宏
	副 査　教授	園山　大祐

論文審査の結果の要旨

本論文は、関西圏に位置するP市をフィールドとして、日本に暮らす「外国人」のエスニック・アイデンティティの形成と表出を、学校、民族学級、地域活動の３つの場から考察した質的調査研究である。具体的には、公立小学校１校と地域のNPO法人を調査対象としている。調査対象の選定にあたっては、「オールドカマー」という呼び方で表現されることもある在日コリアンと、ニューカマー（新渡日）外国人の両者が共存する地域を選定し、地域の文脈や教育実践の連続性のもとで日本に暮らす「外国人」の子どもたちの教育を描いた。その際、研究対象となる「外国人」の子どもたちを「日本生まれ」であるという共通項で捉え、抽出することで課題の明確化を図り、教育実践の具体的発展を目指した。

論文の構成は第1部と第2部からなり、第1部では第2章、第3章、第4章において、それぞれ別の機能をもつ3つの場として学校、学校内の民族学級、地域の中の言語教室が紹介される。第2部には、第5章、第6章が含まれており、直接的にアイデンティティを主題とした部分となっている。第1部の焦点が「場」であるのに対して、第2部のテーマは「人」である。具体的には、日本生まれのベトナム人青年の当事者の語りに加えて、かれらを取り巻く保護者、学校教員、地域活動の支援者という3種類の大人が、ベトナム青年のアイデンティティ形成にどのような期待を抱いているのかを描いた。

これら「3つの場」と「3つの人」、つまり環境や他者からの影響を受けたものとして、個人のエスニック・アイデンティティの形成と表出を読み取るという構図である。そしてこれらすべてを貫いているのは、日本生まれの「外国人」の子どもの教育課題とは何かという問いであり、それに対する応答としては、言語や学力（教育達成）の課題だけではなく、アイデンティティ形成の課題であるということとなる。

本論文の知見は、以下の2点にまとめることができる。第一に、日本におけるニューカマーを対象とした教育研究の分野に対して、ニューカマー児童生徒の適応指導のその後を描いたということである。ニューカマー外国人の受け入れから30年近くが経過しようとしている今、日本生まれの「外国人」の子どもたちは、外からは見えにくいアイデンティティ形成の課題を抱えているのである。第二に、マイノリティのアイデンティティ研究への貢献である。本研究は、ゴフマンの社会的アイデンティティの管理概念を手がかりに、個人がどのようにエスニックな自己を呈示するのかということについて考察した。そこでは、場の機能に着目し、個人のアイデンティティ形成と表出においての、場や他者からの影響力を分析の俎上にのせた。

最後に、本論文がもつ実践的なインプリケーションを整理する。子どもたちの背景の多様化が進む中で、学校や地域で新しい「在日外国人教育実践」が必要とされている。日本生まれの「外国人」の青年の語りからは、日本名で日本人として生きるか、民族名で外国人として生きるかの二者択一でない自己のあり方が明らかとなった。こうした知見をもとに、日本の旧植民地出身者の歴史、そして多様性を育むためにこれまで創りあげられてきた在日外国人教育実践の成果と知見の蓄積の上に、今後の「日本生まれ」の子どもたちのための教育実践、そして研究を積み上げていく必要があることを主張した。

本論文が主題としている「ニューカマーの子どもたちのアイデンティティ形成」というテーマは、グローバル化が進行した現代の日本社会ならではのものである。複数の現場における長期のフィールドワークによって得られた豊富な参与観察・聞き取りデータはきわめて貴重なものであり、分析の結果切り取られたベトナム系の子ども・若者たちのアイデンティティ形成・表出の諸相は、これまで指摘されてこなかった特徴に満ちあふれたものとなっている。本論文が産出した知見は、従来の教育社会学研究および移民研究に大きな学問的貢献をもたらすものと言いうる。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。